20210427
読みかじりの話および付随的思いつき。
少し前に新聞で読んだところによれば、大きな災厄の直後には一時的に自殺が減るが、しばらくしてから急速に増大するという一般的傾向があり、今回のコロナ禍もまさにそれに該当するという（昨年春には一時的に減少したが、その後、特に女性の間で急増）。この説がどの程度厳密に検証されるのか分からないが、何となく「さもありなん」という気がする。
大きな災厄が起きた――ないし始まった――直後には、「みんな大変なんだから、お互いに助け合い、励まし合おう」という連帯感情が自然発生的に高まることがある（犯罪も一時的に減るという）。しかし、そうした連帯感の高揚はそれほど永続きせず、眼前の困難に個々で立ち向かわざるを得ない状況の中で、追い詰められた感覚にとらわれる人が増えてもおかしくない。
1 年ほど前、ヨーロッパのいくつかの国で死者が急増して、目も当てられない状況になったとき、市民たちの間で、物理的距離をとりながらも連帯を確認しようとする自発的な試みが広がったというニュースが伝わり、感動を誘った。そうした動きはその後も続いているのかもしれないが、どちらかというと背後に退き、忘れられがちであるような気がする。日本の場合、ヨーロッパよりはまだしもマシな状況にあるが、「みんなで協力して危機を乗り切っていきましょう」という声は官製のプロパガンダ（あるいはお説教）の形をとることが多く、「下から」の自発的な声としては、「事態が一向に改善しないのはあいつらのせいだ」「いや、お前こそが悪いんだ」というトゲトゲしい声の応酬が目立つように思われてならない。
コロナ禍それ自体はもう 1、2 年もすれば次第に収まっていくだろうが、その間に蓄積した社会経済的疲弊と格差拡大は社会全体および人々の心に深い傷を残すだろう。話は変わるが、このところ世界各地で国際緊張が高まり、一部ではキナ臭い話も出ている。そのことと、これまで書いてきたこととは別と言えば別なのだが、にもかかわらず、思わぬ関係がないとも言い切れない。というのも、心に傷を負った人を多くかかえる社会で大衆心理に火が付けられると、国際的対抗が思いがけない形で暴発し、通常の政治的・軍事的リアリズムでは対処しきれなくなる可能性があるからである。これが杞憂であることを切に祈る。
（追記）。ここ数日、「高齢者」に該当するＦＢ友達の書き込みを見ると、早くもワクチン接種の予約が取れたという報告もあれば、一向にそのめどが立たないという苛立ちの声もあり、かなり自治体間のばらつきが大きいようだ。私の住んでいる市では、予約受付の日程は未定となっているが、新聞報道によれば 5 月中旬までに 43 箱のワクチンが届く予定とのこと。この 43 箱という数字をもとに、ごく大雑把な目の子の計算をしてみると、市の高齢者のうちおよそ 3 分の 2 程度が 2 回ずつ摂取できる分量のようだ。ということは、5 月末から 6 月初頭に若干の追加配分があれば一応の分量は足りることになる。もっとも、ワクチンが届いても、それを実地に接種する態勢の構築はかなり大変なようだ。おそらく市の職員にせよ、医療関係者にせよ、経験したことのない大事業を大急ぎで遂行せねばならず、てんてこ舞いなのだろう。彼らの苦労を思えば若干の遅れや混乱はやむを得ないという思いと、そうした遅れは最小限にしてほしいものだという思いとが交錯する。

20210603
今日、私の住む市で、65-74 歳層のコロナ・ワクチン接種予約受付が開始された。これ以前には 85 歳以上層、75-84 歳層という 2 グループの予約を受け付けていたが、どちらも受付開始後すぐに枠が埋まってしまったという話を聞いていたし、その後、市のホームページ上の情報更新が乏しかったことから、先行する２グループよりも人数の多い 65-74 歳層はどうなることか、いささか不安だった。年齢別区分をせずに一斉に予約受付を開始した他の自治体と比べると、われわれの受付開始はわりと遅めだったが、おそらくその間、国から供給されるワクチンの到着を待ったり、医療機関・医療従事者などとの連絡・調整に手間取っていたのだろう。
8 時 30 分受付開始ということだったので、妻と一緒に２台のパソコンを早めに立ち上げ、事前に書き込める事項を書き込んで、「今や遅し」と時計をにらみ、8 時 30 分になると同時に「予約申し込み」のボタンを押したのだが、タッチの差で、妻はすぐに予約が取れたのに対し、私の方は、「アクセスが集中しているため、しばらくお待ちください。順番につなぎますので、そのままの画面でお待ちください」というメッセージが出てしまった。やれやれと思いながら、ずっと画面をにらんでいると（その間、電話予約も並行して試みたが、ずっとお話し中だった）、約 10 分後に予約可能となった。その間に、妻の予約した日だけでなく、その後の数日間も既に埋まっていて、妻よりも 1 週間後の日の予約ということになった。というわけで、すべて順調だったとはいえないが、待たされた時間が 10 分程度にとどまり、第 1 回接種が 6 月中旬、第 2 回が 7 月初旬と決まったのは、それほど悪くはないというべきだろう（自分の予約が済んでから窓を開けたら、近所で「駄目だ。全然つながらない」と嘆く声が聞こえたから、もっと苦戦中だった人もいたようだ）。
予約受付システムにせよ、実際の接種状況にせよ、自治体間の差異は非常に大きく、個別例をもとに全体像を云々することはできないが、ともかくこの間、接種ペースはかなり上がってきたようだ。全国での総接種件数（医療従事者と高齢者、第 1 回と第 2 回を合わせた総計）は、情報集約方式の差のせいか、情報源によって幅があるが、何とか 1000 万を超えたようであり、毎日の接種件数は、日ごとのばらつきがかなりあるが、およそ 50 万くらいになったようだ。この調子で増えていくなら、政府の目標とする 1 日 100 万件は無理だとしても、70 万程度には届くのではないか。
神戸大学医学部の岩田健太郎氏の解説によると、従来の日本のワクチン政策の基本は、積極的に広く接種することを課題とするものではなく、希望する人がいれば打てるようにするという受身的なものだったという。おそらく、その背景として、かなり多くの人たちの間に漠然たるワクチン不信があり、是非とも打ちたいという人はそう多くないという国民感情のようなものがあったのだろう。大勢の人が早期接種を希望し、それに応えるためにワクチン大量調達に始まって大量接種態勢や予約受付態勢を構築するという課題は、これまで取り組んだことのないものだったようである。そうである以上、各種の混乱が起きるのは当たり前のことであるように思える。私の記憶でも、昨年の間は、ワクチンというものはそう簡単に開発できるものではなく、10 年かかってもできるかどうかというような話が多かった。昨年末あたりから、アメリカなどで意外に急速に開発が進み、接種が始ま

ったというニュースが届くようになったが、その直後の時期には、日本ではワクチン嫌いの人が多いから、あまり接種が進まないのではないかと危惧する声がしばしば聞かれた。日本での接種が話題となり出した頃のアンケート調査では、「すぐに打ちたい」という人は少数で、「しばらく様子を見る」という人が大多数を占めていた。それからほんの 2、3 ヵ月経つか経たないかの間に、国民感情が大きく変わり、「しばらく様子を見る」派が減って「すぐ打ちたい」派が急増した（一部には明確な反ワクチン派も残っているが）。こうして、大多数の人たちが一刻も早く打ちたいのに、そのための態勢整備が遅れているのはどういうわけだという声を上げるようになったが、これは 2、3 ヵ月前とはまるで様変わりである。
客観情勢もそれに関する情報も短期間に大きく変わる以上、国民感情も急速に変化するということ自体は自然なことである。ただとにかく、ほんの２、３ヵ月前まではまるで情勢が違っていたということを思い起こし、記録にとどめておくことにもなにがしかの意味があるのではないか。こういうことを考えるのは、現代史研究に携わる者の性かもしれない。（補足説明）。我が家から行きやすい場所にある集団接種会場は 2 つあり、妻と私で手分けして、それぞれのスケジュールを確かめたところ、妻がアクセスした会場は早くから予約可能だったのに対し、私がアクセスした会場は大分先にならないと予約可能でなかった。そこで、私ももう一つの会場にアクセスしようとしたのだが、その間に接続がタイムアウトとなってしまい、改めて接続し直さなくてはならなくなった。その間、僅か 1、2 分だったが、その間にアクセスが圧倒的に集中したようで、上記のような結果となった。

20210612
数ヵ月前に年来の大仕事に一区切りをつけた後、一種の知的リハビリとして、これまで気になりながらきちんと学ぶことなしに過ごしてきた種々のテーマについて、あれこれの文献を読んだり、思いをめぐらしたりといったことを続けている。そうしたテーマの一つに、第 2 次世界大戦から戦後初期にかけての時期の歴史がある（さしあたってはソ連・東欧諸国が中心だが、日本を含む東アジアの動向も当然関わる）。私は在職中、学生相手の講義ではこの時期にそれなりの重要性を付与していたし、その後もポツリポツリと断片的な知識を仕入れたりしてはいるものの、きちんと勉強することはできずにいた。先行文献は膨大であり、それらを丁寧に吸収しようと思ったら気の遠くなる話になりそうだが、とにかくいくつかの文献に当たってみようという気がしてきた（なお、話題を呼んだ大木毅『独ソ戦』はもちろん読んだが、ドイツ史の観点から書かれたこの本に対してはソ連外交史研究者から一定の批判が出ており、それをどう受けとめるのかも結構難しい問題だ）。そんなことを考えながら、押し入れの中に積み重なっている本の山を引っ繰り返してみたら、William O. McCagg, Jr., *Stalin Embattled, 1943-1948*, Wane State University Press, 1978 という本が出てきた。
この本が刊行された 1978 年は当然ながらまだアルヒーフが開いていない時期であり、その意味で大きな限界をかかえた「古い」作品であることは言うまでもない。他面、スターリン批判から 20 年以上経ったこの頃までには、ソ連でもある程度の資料や回想が公刊されたり、新たな観点からの文献が（異論派によるものを含めて）出てきたし、欧米でも古

典的全体主義論を超えようとする新しい研究が積み重ねられたりしていた（日本でいえば、永井陽之助らによる「叢書国際環境」が出始めた時期であり、ソビエト史研究会もこの頃に創立された）。そうした中で本書がどういう位置を占めるのかをにわかに確定することはできないが、とにかく重要なテーマに挑戦した野心的な作品とは言えそうである。*Stalin Embattled* というタイトルに示唆されるように、スターリンはその絶大な威信と権力にもかかわらず、部下たちをコントロールしきれず、多数のアクター（軍人、産業経営者、党イデオローグ、外国の共産党指導者等々）の上に立ちながら、彼らをどう統御するかに苦慮し、策略をめぐらしていたという捉え方のようである。一連のアクターたちにせよスターリンにせよ、表だった形で対立抗争をしていたわけではないので、「一枚岩」の外観の陰にどのような亀裂があったかを探るには、その発言の「行間を読む」作業を通して状況証拠を積み重ねるほかない。古典的なクレムリノロジーのスタイルを受け継ぐ面もある（なお著者は、スターリンはその内心の意図を文書に定着することを避けたはずだから、将来アルヒーフが開いても決定的な証拠は出てこず、この点は依然として推測によるしかないだろうと書いている。この予想がどの程度まで正当化されるかは、今日検証すべき点である）。こうした手法によっている以上、当然ながら、かなりの部分は仮説としての性格を帯びている。叙述があまり明快でないため、どういう仮説を立てようとしているのかを読み取るのにも結構難渋するが、冷戦開始過程に関して相当大胆かつ論争的な仮説を呈示しているように見える。

こういうわけで、評価の難しい書物だが（当時の書評を見ると、Slavic Review 誌では絶賛されているのに対し、Soviet Studies 誌では極度に辛口で、評価が大きく分かれている）、重要なテーマに取り組み、内政・外交・国際共産主義運動の諸領域にまたがって、当時入手可能だった限りの資料を幅広く利用して（英語・ロシア語・ドイツ語の他、ポーランド語やハンガリー語の資料にも当たっており、日本人研究者の著作としては永井陽之助・入江昭共編の英文論文集が参照されている）、多面的に検討していることから、とにかくも検討する意義はあるのではないかという気がする。今日の新しい条件下で富田武、上垣彰、田嶋信雄各氏らによって進められている独ソ戦研究の立場からはどのように評価されるだろうか。

20210618

昨日、コロナ・ワクチンの第 1 回接種を受けた。副反応は腕にごく軽い痛みがある程度。第 2 回もこの程度で済めばよいが。

これまでの全国の総接種件数（第 1 回と第 2 回の合計）は、少し前に 2000 万に到達と報じられたかと思ったら、今や 3000 万に迫ろうとしているようだ。一日あたりの接種件数は、各地での接種の報告と集約にムラがあるため、正確に把握することができないが、とにかくかなり増えてきており、とても無理と思われていた 100 万という数字に到達したとの説もある。数週間前まで圧倒的に遅れていた日本のワクチン接種がここへきて急速に伸びてきたのは、政府の号令が背景にあるにしても、それを現場で担う末端実務家たちが朝令暮改的指令に翻弄されつつ悪戦苦闘しているおかげだろう。とはいえ、この程度の伸び方では、オリパラ開始時までに感染拡大を抑え込むには至らないだろう。それでも、高齢

者への優先接種のおかげで重症者がある程度抑えられるなら御の字だ（もっとも、変異株は高齢者以外でも重症化しやすいとの説もあり、油断はできないが）。
オリパラ強行開催に伴う感染拡大が若干のタイムラグを経て表面化するのは 8-10 月の頃と予想されるが、その頃になるとワクチン接種率向上による感染抑制効果もそろそろ出てくるかもしれない。とすると、マイナス要因とプラス要因が競い合うようにして作用することになりそうだ。両要因のうちどちらが優位を占めることになるだろうか。

20210621
W・アダムズ、J・W・ブロック『アダム・スミス、モスクワへ行く――市場経済移行をめぐる対話劇』（川端望訳、創風社、2000 年）という本を読んだ。この本のことは、以前にフェイスブック上で訳者と上垣彰氏の間でのやりとりで触れられているのを見たことがあり、そのときから関心をいだいていたのだが、経済の専門書らしいということで、やや敬遠していた。このほど、やはり放置しておくべきでないと考えて、遅ればせに読んでみた。
本書は経済書にしては珍しく、戯曲の台本のような形で書かれ、東欧の架空の国に経済改革アドバイザーとして赴任したアメリカの経済学者と、改革の実務を担う当該国の首相の間でかわされた対話という体裁をとっている。指令経済から市場経済への移行を進めるという目標で二人は一致しているが、具体的な処方箋に関して、アドバイザーが「苦い薬」、「ショック療法」、「ビッグ・バン」を推奨するのに対して、首相の方は、それは理論的には正しいのかもしれないが、あまりにも副作用が大きすぎるという懸念を示して、いわゆる漸進路線をとろうとする、といった形で議論が展開されている。
このような対話ないし論争は、1990 年代初頭の経済改革論争を追った経験を持つ者にとっては、見慣れたものである（本書の原書は 1993 年刊）。ところどころに誇張や戯画化があるような気もするが、大筋においては実際にこのような論争がかわされていたと言ってよいだろう。日本でもこの種の議論は多様な形で紹介されており、特に故・佐藤経明は市場経済への移行の不可避性を説くと同時に「ショック療法」の欠点を衝く独自の論陣を張っていた。
では、元来 1990 年代初頭に書かれた本が 2000 年に邦訳され、それを 2021 年の今日に改めて読むことにどういう意味があるだろうか。とりあえず 2 つの点が思い浮かぶ。1 つは、原著者も訳者も旧社会主義圏の経済を主要研究対象とするわけではないという事情に関わる。本書は直接には旧社会主義圏のことを取り上げているとはいえ、むしろより広い経済（学）一般に関わる問題提起を含んだ書という性格を持っている。経済学者でない私にこの問題に深入りする資格があるわけではないが、本論の各所で、アメリカを含む先進資本主義国はどうなのかという問いかけがあることが目を引く。「日本語版への序文」では、「いかなる経済システムも完全ではない」として、「過剰なデレギュレーション〔規制緩和〕とレッセ・フェールの危険」はアメリカにおいても痛ましいほど明らかだとか、「旧共産主義社会を根本的にリストラクチャリングする壮大な課題について研究することが、今度は、私たちが自分達自身の国内の経済状況をよりはっきりと「わかる」ことを可能にする」かもしれないなどと述べられている。現代の資本主義を考える上でも、本書の議論

は有意味だということだろう。
もう一つには、旧ソ連・東欧諸国における「改革」の歴史をどう振り返るかという問題がある。ペレストロイカやソ連解体から大分時間が経った今日、社会主義経済に関する一般的イメージとして、「計画経済というのはどうしようもない駄目なもので、市場経済に移行するほかないのに、それを理解しない馬鹿な連中がそれに固執していた」というイメージが優勢であり、そんなものには何の関心も払う必要もないという感覚が広まっている。それよりは相対少数だがわりと広まっている意見としては、「指令経済から市場経済への移行はそう簡単に、上から／外からの処方箋で短期に進めることができるはずがないのに、そのことを理解しない馬鹿な連中が無謀な試みをして失敗した」という理解もある。だが、当時の状況に内在していうなら、①指令経済から市場経済への移行以外に活路はないこと、と同時に、②市場経済が然るべく機能するためには種々の条件が必要であり、そうした条件整備に頓着することなく、上からの指令で一気呵成に移行を進めようとするのは無謀であること、という 2 点については、かなり広い範囲の人たちの間に一応の了解があった。問題は、ではどうしたらよいのかという点にあり、①と②を認識さえすれば回答が出てくるわけではないという点にこそ最大の問題があった。当時、課題として意識されながらも答えを見いだせずに終わったこの問いは、今なお問い直す意味――それも、当該国だけにとどまらず、市場経済一般に関わる、より広い意味――を持っているのではないだろうか。
〔付記〕。書物のタイトルでアダム・スミスとモスクワが並べられているのは、一見したところ奇異な取り合わせ――あるいは、この時期ならでの特異現象――との印象を与えるかもしれない。しかし、19 世紀前半のロシアの若い貴族の間ではアダム・スミスを読むことが流行っており、プーシキンのエヴゲニー・オネーギンもいっぱしの知識人気取りでスミスを読んでいた。そうした歴史状況を面白く描いたものとして、久保英雄『歴史の中のロシア文学』ミネルヴァ書房、2005 年、第 3 章がある。